

保育者志望学生の地震防災意識と地震防災教育への課題

馬場 訓子 ・ 佐藤 大介* ・ 高橋 慧**

保育者志望学生を対象に、保育における地震防災に関する意識や子どもへの地震防災教育の実践に関する課題等について質問紙調査を行った。その結果、実習経験の有無に関わらず、保育職に就く前に地震防災について理解しておく必要性について強く認識している傾向があることが分かった。また、実習経験の有無で差異が生じる意識もあることが確認できた。地震防災教育を実践する上での教育内容や自身の課題については、実習経験のない学生は、一般論的な内容で具体性に欠け、幅広い視点で防災教育を捉えていることが分かった。一方、実習経験のある学生は、保育現場の状況や子どもの発達過程を考慮した保育者としての視点や願いの表れた課題を持っている傾向があることが示唆された。

Keywords : 保育者志望学生, 地震防災, 地震防災教育, 課題, 質問紙調査

I. 保育における地震防災と地震防災教育の必要性

近年、自然災害が頻発する中で、保育現場においてもその準備と対応が進められている。その中でも地震は、予測が非常に難しい災害であり、保育中に発生した場合、保育者は自分の命だけでなく子どもの命を守る責務を負うことになる。予測が困難であるからこそ、普段からの意識の持ち方や対策が重要であり、子どもに対する地震防災教育も不可欠である。2022年1月、政府の地震調査委員会は、南海トラフで今後40年以内にマグニチュード8～9級の地震が発生する確率を、前年の「80～90%」から「90%程度」に引き上げた。保育者自身も経験のない巨大地震にどのように備えるべきか、益々、保育者の防災意識の啓発と子どもへの防災教育の重要性を養成段階から検討していく必要があると考える。

2017年改定の『保育所保育指針』においては、子どもの生命を守るため、施設・設備等の安全確保や災害発生時の対応体制及び避難への備え、地域の

関係機関等との連携など、保育所における災害への備えに関する節（項目）が新たに設けられた（厚生労働省, 2017）。南海トラフ巨大地震等の発生に対して懸念が高まる中、保育現場においても高い意識を持って、地域と連携を図りながら、園全体での有事に備えた対策が求められている。

子どもに対する防災教育を含む安全教育に関する内容は、乳幼児教育に関する『幼稚園教育要領』（2017）、『保育所保育指針』（2017）、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』（2017）において、領域「健康」で扱われている。具体的には、「健康」における3つのねらいの中の1つとして、「健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付け、見通しをもって行動する」ことが挙げられ、「危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する」ことが内容として明記されている。その上で、『幼稚園教育要領解説』（2018）、『保育所保育指針解説』（2018）、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』（2018）では、災害時の行動の仕方を身に付けさせるためには、子

岡山大学学術研究院教育学域 700 - 8530 岡山市北区津島中3 - 1 - 1

*川崎医療福祉大学 701 - 0193 倉敷市松島288

**くらしき作陽大学 710 - 0292 倉敷市玉島長尾3515

Issues for Earthquake Disaster Prevention Awareness and Earthquake Disaster Prevention Education of Students Who Want to Become Childcare Workers

Noriko BABA, Daisuke SATOH*, and Kei TAKAHASHI**

Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsumishima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

*Kawasaki University of Medical Welfare, 288 Matsushima, Kurashiki 701-0193

**Kurashiki Sakuyo University, 3515 Tamashima-Nagao, Kurashiki 710-0292

どもの発達の実情に応じて、基本的な対処の仕方を確実に伝える必要があること、また、自然災害を想定した避難訓練においては、保育者の下でその指示に従い、一人一人が落ちついた行動がとれるように訓練を行うことが重要であることが述べられている。幼児期から子ども自身が身を守る術を身に付けられるよう、子どもの発達過程に応じながら、保育において具体的にどのような教育を行っていくべきか、養成段階からの学習が求められることから、今後も活発に議論すべき研究主題であると言える。

保育分野における地震防災に関する研究は、「平成7年(1995年)兵庫県南部地震(阪神・淡路大震災)」「平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)」等を契機に、それまで以上に活発に推進されてきた。保育施設や保育者を対象とした防災に関する取組や意識についての研究や、地域性を考慮した保育現場における実践研究、保育者養成における授業実践に関する研究等、様々な観点で取り組まれている。土木学会(2006)は、防災の目的を「災害から命を守ること」と位置付けし、防災教育に関しては、災害から自分の命を守る力をつけさせるためとして、災害がおきても精神的に打ち負かされないバックグラウンドを形成すること、自然への畏怖、畏敬の念を芽生えさせること、容易に失われかねない命の大切さを実感させることの重要性を指摘している。そして、幼児期の子どもに求めるべきこととして、「災害の実態を漠然と理解し、突然の災害にも過度に動揺しない知識前提を形成すること」、「適切な保護が受けられるようになるまで、最低限自分の命を守り続けられる術を学び、また危険を回避できる状況判断力を身につけること」を挙げている。想像すらできない有事を想定し、その備えとして防災教育を行うことは、保育者にとっても子どもにとっても容易なことではないと考えられる。本当に必要な知識や対応は何なのかを精査しながら、子どもの発達の特長や発達過程を考慮した内容や方法で、地震防災や防災教育の重要性を改めて見直し、実践に落とし込めるさらなる研究の推進が期待される。

近年の保育施設の取組や子どもに対する防災教育に関する主要な研究成果を取り上げてみると、例えば、幼児に対する地震防災保育として、アトラクション型の体験活動を取り入れた事例研究(山田ほか、2016・2020)や、防災教育用カードゲーム・絵本の読み聞かせ・歌を組み合わせた地震防災教育プログラムの実践(小林ほか、2019)に関する研究等、子どもへの具体的な保育実践研究が推進されている。

また、地下ほか(2021)は、大阪府内の保育施設

に勤務する保育者を対象に質問紙調査を実施し、施設の防災対策や避難訓練を含めた防災教育の実施状況として、地域や施設によって異なること、自然災害に関する絵本や紙芝居を用いた実践頻度等を明らかにした。あるいは、千葉ほか(2021)は、K市の主任保育士・主幹保育教諭等を対象に、防災教育の実施状況や内容等について問う質問紙調査から、7割以上が地震・豪雨・洪水の防災教育を実施していること、その方法は、「保育者によるお話」であり、内容は「災害発生時の身の守り方」と「避難場所への移動」が多いことを確認している。以上のような先行研究の概観から、保育者には、発達過程に応じて教育効果の高い教育方法を検討し、実施していく知識と技術が求められると指摘できる。つまり保育者は、普段からの地震への備えに加え、地震発生時の対応、子どもへの防災教育についても努めることが必須であると言える。そのことを前提にすると、保育者養成校においては、地震に対する高い対応力や防災力を持った保育者の育成が課題である。

本研究では、保育者志望学生に見る保育における地震防災への意識や子どもへの地震防災教育に関する課題を明らかにする。その上で、今後の保育者養成校での保育における地震防災に関する教育内容の検討や、学生への指導を行う上での示唆を得ることを目指す。生命に直結する重要な保育内容にも関わらず、その養成段階における教育内容や学びについては、未だ検討の余地があると考えられる。本論では、保育者志望学生の保育における地震防災に関する意識の傾向を明らかにし、さらに地震防災教育の保育実践に焦点を当て、子どもに身に付けさせたい内容と実践上の課題について検証し、保育者養成校での授業内容や指導内容の再検討に示唆を得ることを目的とする。

II. 方法

1. 調査対象及び時期

調査対象は、岡山県内保育者養成校4大学(短期大学を含む)の学生369名(1年139名、2年84名、3年86名、4年60名)である。欠損値等はなかったため、この全員を分析対象とした。調査時期は、202X年5月～6月であった。

2. 調査内容及び手続き

保育者志望学生の保育における地震防災に関する意識や課題等を検討するために、Googleフォームを活用したオンライン質問紙調査を実施し、質問票への回答を求めた。質問項目は以下の通りである。

まず、保育における地震防災に関する意識を問う質問として、A) 保育に必要な地震防災に関する知識を持っている、B) 子ども(就学前)を対象として地震防災に関する教育を行うことができる、C) 保育時に地震が発生した際の適切な対応について理解している、D) 地震発生時に子どもを安全に避難させる方法を理解している、E) 保育職に就く前に地震防災について理解しておく必要がある、F) 大学生になってから保育に必要な地震防災について考えたことがある、の計6項目を設定した。「まったくあてはまらない」から「とてもあてはまる」の5段階評定(1~5点)で得点化し、分析に用いた。

次に、保育における地震防災に関する意識や課題を問う質問として、SCT(文章完成法)に準じたものを設定した。SCTは、曖昧かつ省略された未完成文章(刺激文)に対する自発的表現によって被検者の総合的な理解を図ろうとする心理検査であり、何を連想するかという点に無意識が関与する、投影法の1つとされる(小林, 1999; 佐野ほか, 1960)。全ての調査対象から一定の広範かつ厚みのある回答を得るため、この手法を援用した。具体的には、①地震防災に関する教育において子ども(就学前)に学んでほしいことは____(以下、自由記述)、②子ども(就学前)を対象として地震防災に関する教育をする上であなたの課題は____、③保育時に地震が発生した際の対応について不安なことは____、④保育職に就く前に地震防災について学びたいことは____、⑤保育に必要な地震防災を大学で学ぶ方法として____、を設定し、回答を求めた。本論では、質問①と②について、分析と考察を行う。

調査対象者には、質問票の説明を行い、理解を得た後、調査協力を求めた。匿名性を守り、データの取り扱いに留意すること、またデータは全て統計的に処理され、個人が特定されることはないことを伝

え、同意を得た上で調査を実施した。回答は無記名とし、フェイスシートとして「性別」「学年」「出身都道府県」「実習の経験」「保育職への志望の程度」「自然災害の経験(記憶のあるもの)」等の記入を求めた。

Ⅲ. 結果と考察

1. 保育における地震防災に関する意識

保育者志望学生の保育における地震防災に関する意識について、実習経験の有無による差異を調査するため、IBM SPSS Statistics 24を用い、対応のないt検定を行った(表1)。その結果、E)の「保育職に就く前に地震防災について理解しておく必要がある」については、実習経験の有無に関わらず、高い平均値となっていた。南海トラフ巨大地震等への危機が迫る中で、社会的にも年々、自助の観点からも地震防災について関心が高まっていることもあり、学生が地震防災に高い関心をもっていることが窺える。保育者を目指すに当たり、その専門職性の1つとして、地震防災についての知識や技術を身に付けなければならないことから、高い意識を持っていることは望ましいことである。

一方で、A)「保育に必要な地震防災に関する知識を持っている」、B)「子ども(就学前)を対象として地震防災に関する教育を行うことができる」、C)「保育時に地震が発生した際の適切な対応について理解している」、D)「地震発生時に子どもを安全に避難させる方法を理解している」、F)「大学生になってから保育に必要な地震防災について考えたことがある」の各項目において、実習経験の有無によって統計的に有意な差が見られた。特に、平均値を比較すると、いずれの項目においても、実習経験あり群の方が高い値となっていた。つまり、実習前は、地震防災に対する知識不足や経験不足、不安を

表1 実習経験の有無による保育における地震防災に関する意識の差

	実習経験なし			実習経験あり			t	df	p	d	Power (1-β)
	n	M	SD	n	M	SD					
A) 保育に必要な地震防災に関する知識を持っている	210	2.40	0.94	159	2.87	0.97	-4.72	367	0.000	0.49	1.00
B) 子ども(就学前)を対象として地震防災に関する教育を行うことができる	210	2.31	0.99	159	2.67	1.02	-3.41	367	0.001	0.36	0.96
C) 保育時に地震が発生した際の適切な対応について理解している	210	2.43	1.02	159	2.92	1.02	-4.65	367	0.000	0.48	1.00
D) 地震発生時に子どもを安全に避難させる方法を理解している	210	2.30	0.99	159	2.76	0.99	-4.48	367	0.000	0.46	1.00
E) 保育職に就く前に地震防災について理解しておく必要がある	210	4.39	1.06	159	4.38	0.91	0.02	367	0.984	0.01	0.06
F) 大学生になってから保育に必要な地震防災について考えたことがある	210	2.80	1.11	159	3.25	1.01	-3.92	367	0.000	0.42	0.99

強く感じていることから生じた差異であると推察される。実習では、子どもとの日々の生活を通して、防災に関する保育環境や保育内容に触れる機会が少なからずあると考えられる。一方、実習経験のない学生が子どもと接する場合、自身の知識の少なさを痛感する者もいると考えられる。そのような学生にとって、子どもに教育・保育することへの不安は大きいであろうが、実習によって改善が見られることは、今後の防災教育において好ましい結果であると言える。

さらに、C)とD)の結果については、実習経験の有無によって、有事にどのような状況になるかを具体的に想像できるかどうかに関連していると考えられる。子どもの生活の様子や発達過程、実情を実習経験から理解している学生は、有事の際に、保育者が自分の身を守るだけでなく、子どもの安全確保にまで及ぶ保育者の責務を十分認識しているだろう。そのような学生は、保育現場には乳児、歩行もままならない子ども、パニックを起こす子ども、様々な年齢や特性のある子どもがいることを想定し、地震が発生した際、混乱の中で安全確保や避難が多様化することを、容易に理解できる。限られた保育者で安全に避難させることがどれほど重要なことか、その責務への認識や理解が、子どもの発達や実態を漠然としか想像できない実習経験のない学生との違いとして表れていると推察できる。

F)については、保育者養成校で地震防災に関する内容は、保育内容「健康」に関連する授業内で扱われるため、授業を履修していれば考える機会があったと考えられる。そのような授業は、養成校によって履修時期は異なるが、実習前の学生は養成の初期段階にあり、時期的に未履修の場合が考えられる。実習経験のある学生については、5領域に関する授業がほぼ履修済である場合も多い。それに加え、実習経験が危機感を掻き立て、安全管理や安全教育の観点から保育に関する地震防災について考える機会もあったと考えられる。また、実習経験のある学生は、実習期間内に避難訓練等を経験すれば、実習中にも実習後にも考える機会があっただろう。

2. 子どもに対する地震防災教育の内容と実践に関する課題

保育における地震防災に関する意識や課題について検討するため、記述データを対象にテキストマイニングソフト・KHCoder (3. Beta.05a) ^{注1)}による分析を試みた。KHCoderは、質的なテキストを数値データとしても扱うことによって、考察の恣意性を排除することで客観性を向上させ、テキストに

潜む情報を要約し理解する上で非常に有用である。

まず、各回答の全ての文字データをChasen^{注2)}(松本, 2000)により分かち書きし、質問①については16,595語を抽出し、その中から、6,636語を分析に用いた。同様に、質問②については、15,487語を抽出し、6,245語を分析に用いた。分析に用いた語は、KHCoderの品詞体系に従った。また、分析対象となる語の統一性を確保するため、語の趣旨を損なわないよう配慮しながら、「幼児」「園児」「こども」「子供」は「子ども」に、「教師」「教諭」「先生」「保育士」は「保育者」に統一する等、語の置換作業を行った。さらに、本来連続して使用される語を分けて分析しないために、強制抽出の処理を行った(例えば「地震防災」「避難訓練」「保育施設」等)。

次に、実習経験の有無による学生の記述の傾向を把握するため、「共起ネットワーク」の検討を行った。共起ネットワークとは、出現パターンの似通った語、すなわち共起の程度が強い語を線で結んだものである(樋口, 2020)。共起ネットワークでは、布置された位置よりも、線で結ばれているかどうかの意味があり、線が太いほど共起の関係は強い。また出現数の多い語ほど大きな円で示されている。群(実習経験あり群、実習経験なし群)を見出しとして含め作成した共起ネットワークでは、より視覚的に頻出語を捉えることができ、それぞれの群の頻出語の関連も一目で理解することができる。

以上の作業を行った後、頻出語の内容及び出現頻度について分析した。各質問に対する全回答の頻出語上位50語についても、それぞれ表に示した(「する」「なる」等の意味を成さない語は除いた)。また、実習経験あり群、実習経験なし群毎の特徴語とJaccardの類似性測度も示した。

(1) 子どもに学んでほしい地震防災教育の内容

「地震防災に関する教育において子ども(就学前)に学んでほしいこと」の内容についての回答では、表2に示すように、「自分」「地震」「守る」「思う」「身」「学ぶ」「避難」「行動」等が主要抽出語として確認できた。主要抽出語を基に、コンコーダンス分析により文脈を確認しつつ質的に検討すると、全体の記述傾向として、①地震発生時には自分の身(命)は自分で守るということやその大切さ、②避難の方法や行動、③落ち着いて安全に避難すること、④大人の指示を聞くこと、等を学び、身に付けてほしいと考えている学生が多いことが分かる。また、地震の怖さを知ること大切であると考えていることも窺える。自助の方法や意識、具体的な避難の方法や行動、地震の危険性の認識を深めてほしいと願う学生の考えを読み取ることができる。図1には、実習経

表2 子どもに学んでほしい地震防災教育の内容に関する頻出上位50語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
自分	284	大切	87	聞く	50	落ち着く	38	分かる	22
地震	267	知る	80	隠れる	49	起こる	36	自身	21
守る	240	子ども	78	災害	49	理解	35	話	21
思う	149	下	61	危険	48	方法	32	地震防災	20
身	145	机	60	先生	46	必要	31	持つ	19
学ぶ	134	頭	57	避難訓練	44	言う	30	場合	19
避難	122	怖い	57	来る	41	守れる	28	発生	19
行動	110	逃げる	54	大人	40	仕方	26	いつ	17
起きる	108	安全	51	考える	38	指示	26	パニック	17
命	99	人	51	周り	38	場所	24	実際	17

験の有無毎に見た主要抽出語の共起ネットワークを示した。また、表3には、実習経験の有無毎の特徴語と Jaccard の類似性測度、表4には、子どもに学んでほしい地震防災教育の内容に関する記述例を実習経験の有無毎に示した。これらの結果から、実習経験の有無で回答の傾向を具体的に検討すると、実

習経験あり群では、①大人の指示や誘導に従うこと、②落ち着いて行動すること、③避難訓練の意味や真面目に取り組む大切さ等、保育現場の状況や子どもの発達過程を考慮した保育者としての視点や願いの表れた記述が見られた。事前の備えや避難訓練の大切さなど、防災教育の重要性や取り組む姿勢について

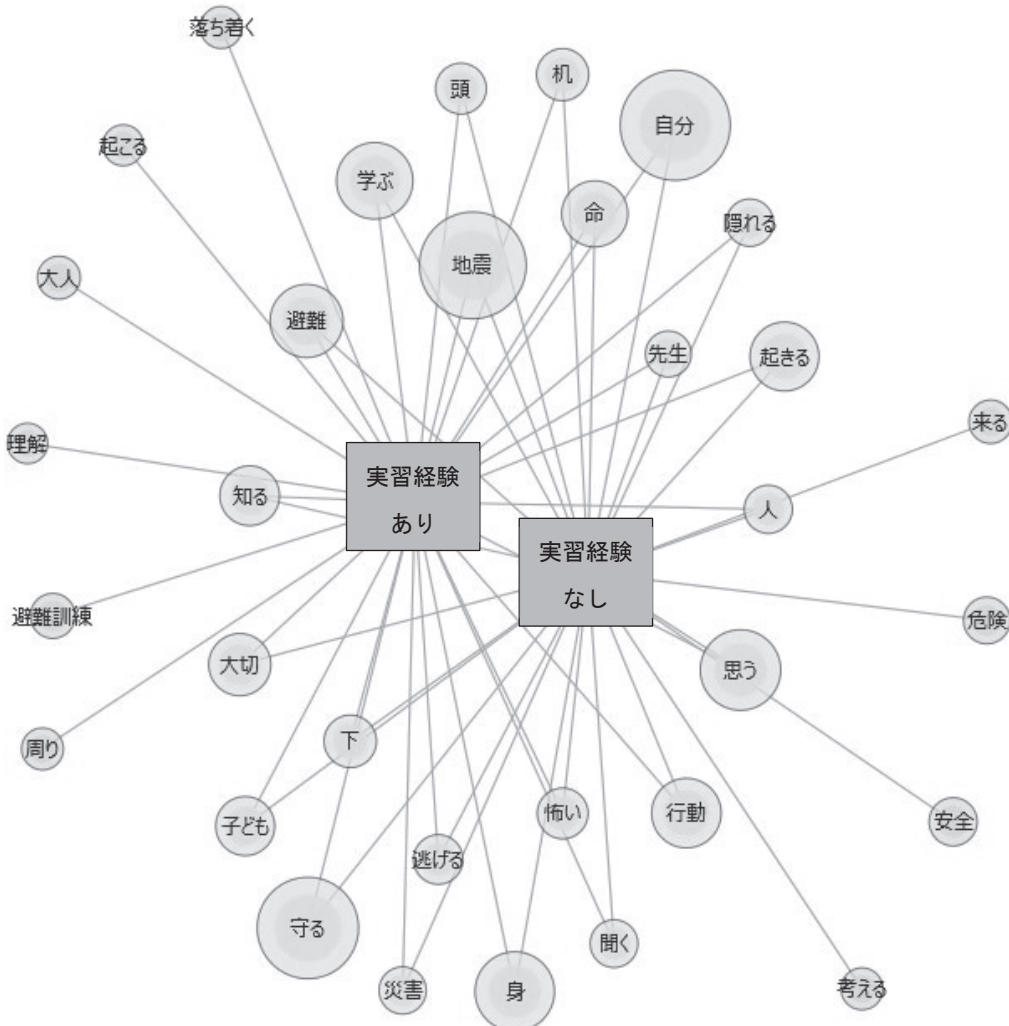


図1 子どもに学んでほしい地震防災教育に関する内容の主要抽出語の共起ネットワーク (N35, E56, D.094)

表3 群毎の特徴語とJaccardの類似性測定

実習経験あり		実習経験なし	
地震	.337	自分	.363
守る	.299	起きる	.222
思う	.243	大切	.163
身	.237	子ども	.160
学ぶ	.232	下	.156
避難	.201	机	.150
行動	.187	安全	.144
命	.160	隠れる	.132
知る	.158	危険	.130
頭	.126	怖い	.127

でも着目していることが指摘できる。

一方で、実習経験なし群では、①机の下に隠れること、②安全に避難すること等、発生時の限定的な避難行動のみを記述する学生が多かった。多くが「安全に避難すること」という一般論的な記述にとどまり、具体性が見られない。以上の考察は、表3に示した抽出語に重複が見られない結果からも注目し得る。保育者養成校における実習の重要性が改めて確認できる調査結果である。

保育所や幼保連携型認定こども園においては、月に1回、幼稚園については、年に2回以上の避難訓練の実施が義務付けられている。避難訓練の内容については、火災や不審者対応等も含まれるため地震のみとは限らないが、実習経験のある学生の中には、実習中に何らかの避難訓練を経験する者もいたであ

ろう。特に、実習中に避難訓練を経験した者であれば、どのような避難場面であっても全員の子どもの安全に避難させるのに、どれだけの労力を要するか、容易に想像がつかせよう。そのような学生は、有事に際して、人数の限られた保育者で多くの子どもの安全に避難させる困難さを、自らの体験を通して実感したのではないかと考えられる。また実習経験のある学生は、ある程度子どもの発達の特長や発達過程を理解していることから、実際の子どもの姿をイメージし、有事にどのような状況になるか想像できる。いずれにしても、有事には、まずは自分自身の命を守ること、それに加え子どもの命を守る準備をしておくべきであることを自覚していると推察できる。

(2) 子どもに対する地震防災教育の実践に関する課題

「子どもを対象として地震防災に関する教育をする上での自身の課題」についての回答では、表5に示すように、「子ども」「地震」「自分」「知識」「伝える」「避難」「理解」「知る」等が主要抽出語として確認できた。これらの語を基に質的に検討すると、全体の記述傾向として、①子どもに地震や避難の仕方を分かりやすく伝えること、②地震や地震防災についての知識がないこと、等が指摘できる。以上のことは、学生が自分自身の保育技術に関する課題や、地震や地震防災に関する知識の習得に関して課題意識を持っている状況を意味している。図2に示す共

表4 子どもに学んでほしい地震防災教育の内容に関する記述例

【実習経験あり】

- 過度に怖がらずに落ち着いて対応すること、とにかく自分の命を優先すること、周囲の大人にしたがって行動することが大切だということです。(学生A)
- 自分自身を守る方法です。先生など近くに大人がいたとしても全部に目が行き届くかという点と限度があると思うので、自分自身を守る方法だけは身につけてほしい。自分の命は自分で守るために避難訓練は毎回真剣に行い、いざという時にどう行動すれば良いかを日頃から考えておく。(学生B)
- 地震の恐ろしさやいつ起きてもおかしくないということです。避難訓練も遊びではなく、真面目にいつ地震や火事が起きてもみんな逃げられるようにしておかないといけないうこと。自分の命を守ることの大切さを学んでほしい。「練習は本番のように。本番は練習のように」を意識して避難訓練をしたい。(学生C)
- もし地震が起きてしまった時に、落ち着いて行動できるように、避難の仕方やそれぞれの地域の避難経路について学んでほしいと思う。地震がどれだけ怖い事かということです。就学前の子どもに伝えることは難しいと思いますが、先生や保護者の方の話をよく聞いて逃げるということを伝えて、少しでもわかってもらいたいです。(学生D)

【実習経験なし】

- 地震が起こったらまず自分の身を守るためにどうすればいいのか、どうやって逃げればいいのかを学んでほしい。(学生E)
- 地震がきたらまずは机の下など安全な場所へいき、揺れがなくなるまではその場から動かないということを学んでほしいです。(学生F)
- 地震が起きたときに、まず自身の安全を確保することの重要性を学んで欲しいです。揺れがおさまったから大丈夫と思わず、安全な場所に移動することを覚えて欲しいです。(学生G)
- 実際に地震が起きた時にどうやって安全を確保するかを学んでほしいです。地震が起きたらパニックになると思うので、どう行動したらいいかを知っていれば命を守ることが出来ると思うからです。(学生H)

起ネットワークと表6の結果から、実習経験の有無毎に回答の傾向を検討すると、実習経験あり群では、①子どもが理解できる言葉で、どのように伝えるか、どのようにして知らせるか、②防災について知ること、知らせること、等の記述が確認できた。まずは、自分自身が地震について「知る」「理解する」ことが重要であると考えていることが示唆された。それに加え、子どもが「知る」「考える」「理解する」等

の子ども主体の記述が多く見られ、それを促すために保育者として、地震や避難方法、身の守り方やその大切さ等を、具体的にどのように指導するかを課題としている学生が多い結果となった。さらには、表7に示す記述例にもあるように、発達過程を考慮して、指導に使う具体的な視覚教材や方法について触れられていた。自分自身が防災に関する具体的な知識を身に付けておくことの重要性や、それらを子

表5 子どもに対する地震防災教育の実践に関する課題についての頻出上位50語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
子ども	352	教える	73	学ぶ	52	落ち着く	32	危険	22
地震	164	自身	72	守る	52	説明	31	不安	21
自分	162	分かる	72	起きる	48	災害	30	パニック	20
思う	142	身	66	対応	45	持つ	28	逃げる	20
知識	123	考える	61	避難訓練	38	方法	28	難しい	20
伝える	111	教育	58	正しい	36	仕方	26	保育者	19
避難	99	必要	58	言葉	34	実際	26	感じる	18
理解	84	課題	55	大切	34	怖い	24	経験	18
知る	82	行動	54	防災	33	命	24	地域	18
地震防災	79	安全	53	起こる	32	出来る	23	避難場所	18

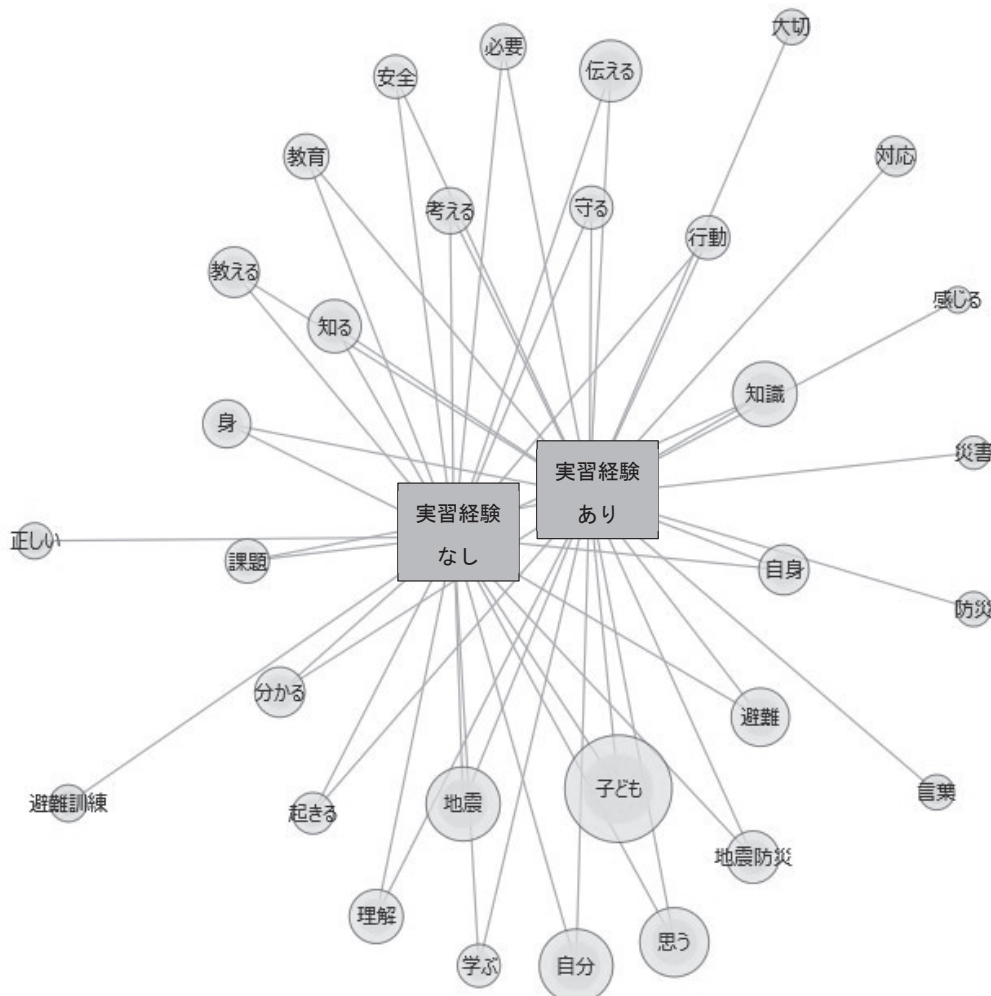


図2 地震防災教育の実践に関する課題についての主要抽出語の共起ネットワーク (N33, E54, D.102)

表6 群毎の特徴語と Jaccard の類似性測度

実習経験あり		実習経験なし	
伝える	.250	子ども	.469
知る	.176	思う	.325
自身	.168	自分	.319
考える	.160	地震	.288
理解	.160	知識	.262
必要	.141	避難	.202
分かる	.140	教える	.185
守る	.122	地震防災	.173
対応	.108	身	.170
防災	.105	課題	.139

どもに伝える必要性についての言及が認められる。

一方、実習経験なし群では、①自分が正しい知識を身に付けること、子どもに正しい知識を教えること、②避難行動や避難場所について学んでおくこと、等の記述が見られ、地震に対する知識不足を自覚し、自分自身が正しい知識を学んでおくことが課題であると考えている学生が多いようである。それと並行して、子どもに正しい知識を「教える」ことへの意識が強く、多くの学生が避難訓練を想定していることが指摘できる。地震防災に関する子どもへの教え方や伝え方等の方法論を課題に挙げている学生もいるが、その基礎となる防災の知識を自らが身に付け

表7 子どもに対する地震防災教育の実践に関する課題についての記述例

【実習経験あり】

- 自分自身が地震防災について勉強し、理解することです。そして、子どもたちが理解できるように、わかりやすい言葉で伝えられるようにすることです。(学生A)
- 子どもへ地震防災に関することを伝える時の伝え方がまだ分からないこと。保育者として伝え方を間違えてしまえば子どもたちに命の危険が迫ってしまうかもしれないから伝え方を考えておきたい。(学生B)
- どのようにして子どもたちに伝えるかです。まだ就学前で、難しい言葉や説明では頭に入らないだろうし、聞いてもイマイチ分からないと思うので、DVDや分かりやすい絵本、イラストを用いて教育をしていくことが大切だと思います。(学生C)
- 恐怖心ばかり植え付けず、しかし、自然災害の恐ろしさをどのように伝え、子どもたちに自分の命を守ることの大切さを知ってもらえるようにするかが課題です。(学生D)
- 子どもたちにも分かりやすく簡単に伝えつつも、大切なことはきちんと伝えられるようにすることです。視覚的にわかりやすいもの等も活用したいです。(学生E)
- 避難訓練や、自分の命を守ることの大切さをどのように言えば伝わるのかが分からない。身を守ることの大切さを伝えられるようにしたい。(学生F)
- 年齢に合わせてわかりやすく伝え、理解もしっかりできるようにするための伝え方。(学生G)
- 絵や劇などの視覚的な説明を用いて、分かりやすく教えて子どもに防災について理解してもらうこと。また、防災教育を何度も繰り返し伝えること。(学生H)
- 子どもに訓練の意味を上手く伝えることができるかです。私の言葉で子どもたちにどうすればこの訓練が大切で、もし地震が起こった時に同じことができるかを伝えないといけないからです。(学生I)
- 子どもが防災に興味を持てるようにすること。(学生J)

【実習経験なし】

- 安全に子どもたちを避難させる方法をしっかりと学び、理解しておくことです。そして、子どもたちに自分の身の守り方を教えられるように、まずは自分がしっかりと理解することです。(学生K)
- 自分自身が地震にあった際に子どもたちをどのように誘導するべきなのか、どのように声掛けができるのかをしっかりと考えることで、子どもたちに地震防災について教えてあげられると思います。(学生L)
- 地震について、まずは自分が知識をつけることです。教えるという立場になる以上、自分がそれに詳しくないと教えられないので、まずは自分の知識を高め、そしてその後に子どもに教えるべき内容や教え方を考えたいと思います。(学生M)
- 自分自身が地震防災についてもっと知ることです。まだ知識が浅く、子どもに教えることが出来ないからです。(学生N)
- まずは自分自身がきちんと地震防災についての知識を身につけておくことです。知識がないと間違ったことを教えたり何も教えられないかもしれないので、きちんと知識も身につけておく必要があります。(学生O)
- 地震防災の重要性は理解しているが、子どもたちに教育をするとなると具体的に何を教えればよいのか、どう教えればよいのか完全に理解できていない。(学生P)
- 地震についての知識をつけることです。自信を持って子どもに正しい知識を説明できるようになる必要があります。(学生Q)
- まず、自分が地震災害について知ることだと思います。保育者側の知識がないと、いざという時に子ども達を安全に避難させる事ができなかつたり、避難訓練など教えたりできないからです。(学生R)

ることを、最大の課題としてイメージしていると考えられる。

地域性も想定できるが、保育の現場での地震防災教育は、基本的な生活習慣の指導のように日々継続して行われるものとは考えにくく、避難訓練等の機会に、単発的・定期的に行うのが一般的であると考えられる。子どもにとっては、日常的な事柄ではなく、それほど頻繁に体験できる機会がないからこそ、難しいとも言える。また、地震防災について正しい知識の習得を抱負に持っていたり、子どもを相手にした避難訓練の経験があったり、地震に関連する教材を知っていたり作ったりしたことのある保育者志望学生は、非常に少ないと推測される。しかし、保育職としての責務の一つとして、自らが主体となって地震防災の指導を実施できるに足るだけの知識と経験を積んでいく必要がある。

IV. 総括と今後の課題

保育者志望学生は、第1に、地震や地震防災について知識不足であると感じており、「保育職に就く前に地震防災について理解しておく必要がある」と認識している。第2に、子どもへの地震防災教育に関しては、子どもに教育できる程度と水準の知識や技術の習得が必要であると自覚している。特に、実習経験のある学生は、分かりやすく子どもに教育するための指導法について学ぶことが課題であると認識している。今後の課題としては、保育者が子どもに対して、どのようなことを重視して身に付けさせたいと考えているのかを明らかにし、学生の認識との比較をしなければならぬだろう。実際の保育で不可欠だと考えられる知識や技術を明らかにし、保育者養成校においては、そのような内容を重点的に学べる授業内容を再検討することが重要である。

注

- 1) KHCoderは、内容分析（計量テキスト分析）もしくはテキストマイニングのためのフリーソフトウェアである。<http://khc.sourceforge.net/dl.html>
- 2) ChaSen（茶筌）は、奈良先端科学技術大学院大学松本研究室で開発された形態素解析ツールである。

引用文献

- 地下まゆみ・岡みゆき（2021）. 幼児期における防災教育の実践に関する研究 大阪大谷大学教育学部幼児教育実践研究センター紀要, 11, 35-44.
- 千葉武夫・清水益治（2021）. K市の保育所等における防災教育の実態調査 帝塚山大学子育て支援センター紀要, 2, 9-21.
- 樋口耕一（2020）. 社会調査のための計量テキスト分析（第2版）内容分析の継承と発展を目指して ナカニシヤ出版.
- 厚生労働省（2017）. 保育所保育指針 フレーベル館.
- 厚生労働省（2018）. 保育所保育指針解説 フレーベル館.
- 小林真・五十嵐望美・竹田誠・窪田広美（2019）. 幼児に対する防災教育プログラムの実践 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要教育実践研究, 14, 75-93.
- 小林哲郎（1999）. S C T 氏原寛・小川捷之・近藤邦夫・鎌幹八郎・東山紘久・村山正治・山中康裕編 カウンセリング辞典 ミネルヴァ書房.
- 文部科学省（2017）. 幼稚園教育要領 フレーベル館.
- 文部科学省（2018）. 幼稚園教育要領解説 フレーベル館.
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省（2017）. 幼保連携型認定こども園教育保育要領 フレーベル館.
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省（2018）. 幼保連携型認定こども園教育保育要領解説 フレーベル館.
- 佐野勝男・横田仁（1960）. 精研式文章完成法テスト解説：成人用 金子書房.
- 社団法人土木学会 巨大地震災害への対応検討特別委員会 地震防災教育を通じた人材育成部会（2006）. 一から始める地震に強い園づくり「幼稚園・保育園のための災害対策・防災教育ハンドブック」 http://www.bousai-gate.net/handbook/i_chikara_handbook_3.pdf (2021/09/29 閲覧)
- 山田伸之・丁子かおる（2016）. 和歌山市立岡山幼稚園での地震防災保育についての一考察 和歌山大学防災研究教育センター紀要, 2, 44-49.
- 山田伸之・丁子かおる・馬場 訓子・高橋 敏之（2020）. 園の特色を活かした地震防災保育の事例研究—育ち合いから学びをつなぐ— 和歌山大学教育学部紀要教育科学, 70, 33-40.